

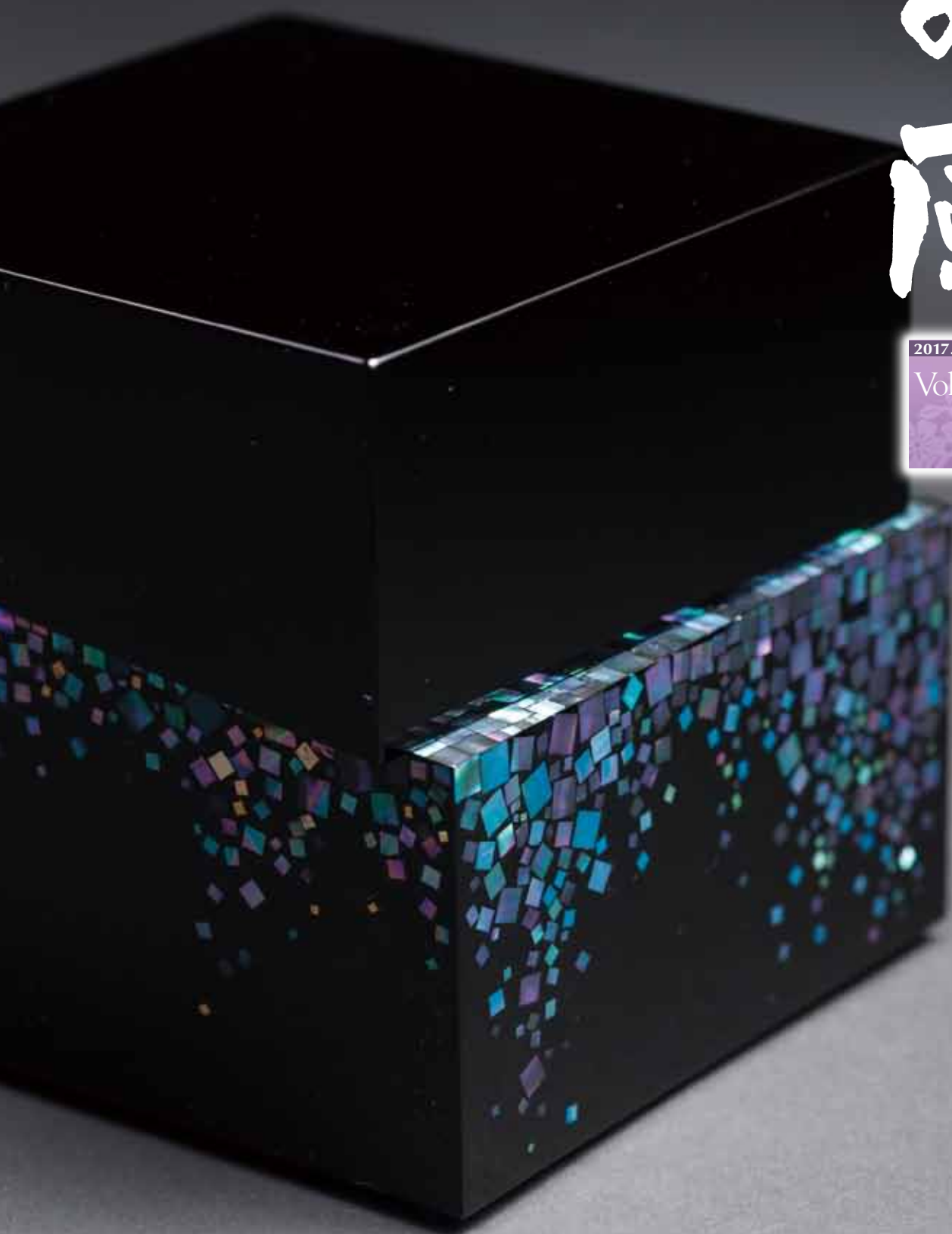
一般財団法人 沖縄美ら島財団 広報誌

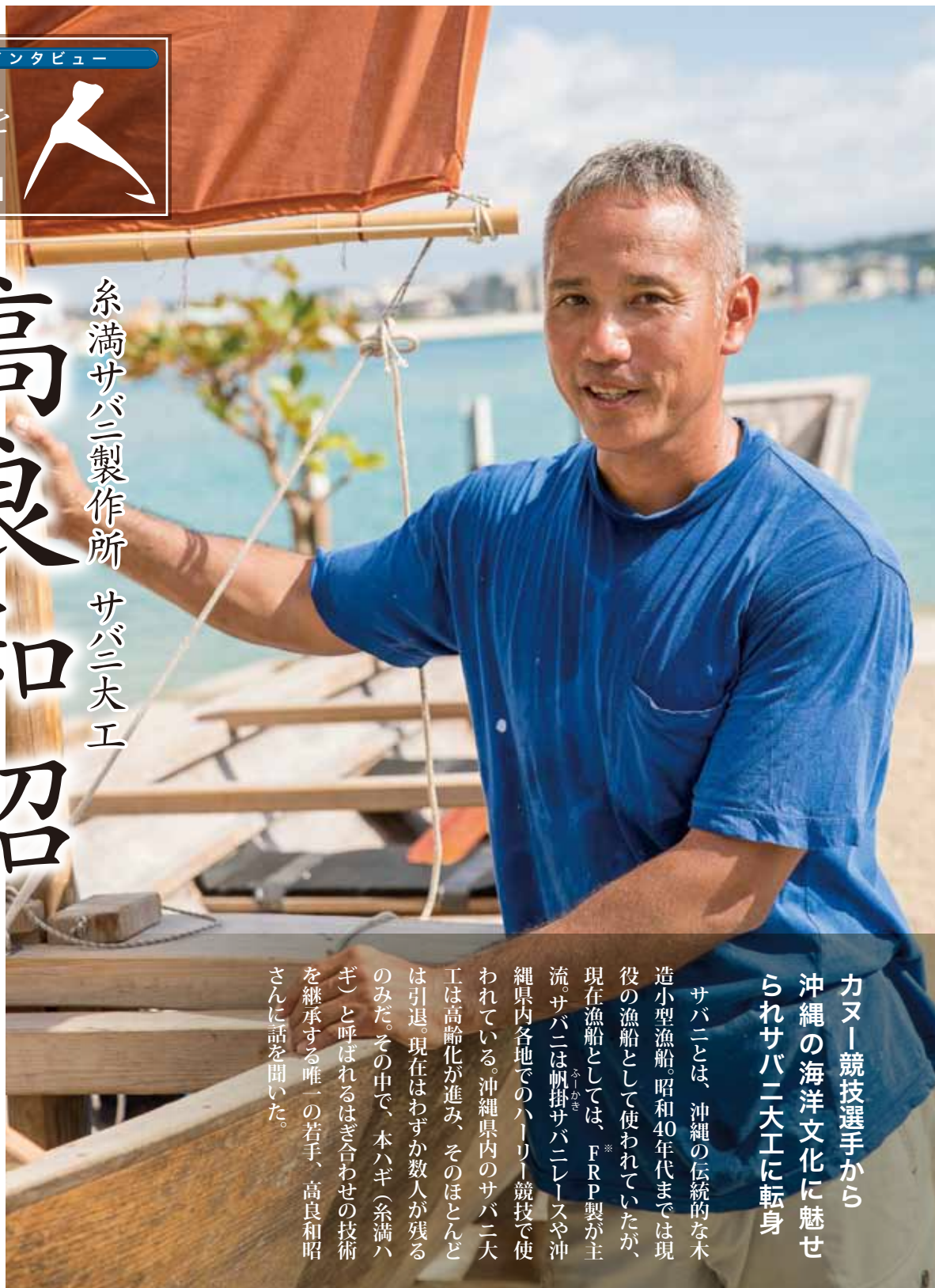
ふえーぬかじ

南ぬ風

2017.1~3

Vol. 42
冬号





高良和昭

TAKARA KAZUAKI

文＝いのうえちず

糸満サバニ製作所 サバニ大工

先人の叡智が宿るサバニのすばらしさを継承していきたい

―カヌーの選手からサバニ大工になったのは、どうしてですか？

僕はカヌー競技の中でも、静かな競技場の中でスピードを競うフットウォーターの選手でした。2000年にサバニに乗る機会がありました。カヌーとは違い、サバニは波のあるところへ出ると、逆に安定するのが面白かった。帆掛サバニに乗ると、帆で風をつかむ感覚、船体に取り付けたラダーではなく、舵取り用の長い櫂（さぐり）を使って舟を操る感覚…乗るというより、乗りこなすという感覚で。サバニは横波を受けても船体そのものが粘って、ねじれながら潮を切って走るんです。

―海の上を“走る”んですか。

糸満では「サバニを走らせる」という言い方をしますし、実際、風をつかんでいると海の上を疾走している感覚がありますね。これはカヌーにはない感覚で、自分で乗るサバニを自分で作りたいと思うようになって、6年前に大城清師匠に弟子入りしました。

―カヌーとは違う魅力ですか。

島を渡って移動する、航海する魅力。エンジンがない時代を思うと、もしかして昔の人には現代人

カヌー競技選手から
沖縄の海洋文化に魅せ
られサバニ大工に転身

サバニとは、沖縄の伝統的な木造小型漁船。昭和40年代までは現役の漁船として使われていたが、現在漁船としては、FRP製が主流。サバニは帆掛サバニレースや沖縄県内各地でのハーリー競技で使われている。沖縄県内のサバニ大工は高齢化が進み、そのほとんどは引退。現在はずか数人が残るのみだ。その中で、本ハギ（糸満ハギ）と呼ばれるはぎ合わせの技術を継承する唯一の若手、高良和昭さんに話を聞いた。

※FRP:繊維強化プラスチック

沖縄県立沖縄水産高校在学中の1989年、カヌー競技でバルセロナ五輪の強化指定選手になり、複数の世界大会に出場。同年、国体の少年C―2で2位に。県外の実業団で競技を続けたが、1999年に沖縄へ帰る。沖縄水産高校職員だった2001年のみやぎ国体では9位入賞。2010年、糸満のサバニ大工大城清氏に弟子入り。船大工となる一方で、各種サバニレースにも出場し、上位入賞常連組となる。

にはない野生の勘があったのではないかと思っています。今はGPSなど便利な道具もありますが、帆掛サバニには、風や潮を読むという人間力を呼び覚ましてくれる力があると思います。

―そこから自分で作ってみたいという発想になったのがすごい。

ヨットもカヌーも既製品を使いますが、もともとサバニは漁の目的によって大きさも形も違うオーダーメイドでした。丸太をくりぬいて作る丸木舟から、板と板をはぎ合わせてつくるはぎ舟へと進化していく過程で、今の形ができた。本はぎでは、底地は分厚い板をくりぬいて作り、側板を曲げてはぎ合わせていきます。板を曲げる時は、熱湯をかけて、少しずつ圧を加える。舳肥（おしほ）杉（すぎ）を使うことが多いんですが、同じ杉でも木によってクセも違うので、それを見極めて作業する。切った後も木は生きているんだと感じますね。

糸満では上等なサバニが完成すると、「ユー生マリタン（よく生まれできた）」と言います。100年かけて育った木が、サバニになることで新たに命を与えられたことを象徴する表現でしょう。



毎年6月に、座間味島から那覇までを競う「サバニ帆走（はんそう）レース」にて。アウトリガー部門と、アウトリガーなしの古式サバニ部門があり、2016年も古式部門で優勝。

―海洋文化館にも師匠の大城清さんと高良さんが造ったサバニが展示されていますね。

はい。糸満から本部の海洋博公園まで海で行って、浜から納品しました。こんなことを言うとおかしいでしょうけど、展示用だとわかっていても、せっかく生まれたのに、一度は海を走らせてやりたいという気持ちもありました。

contents

美ら島をつなぐ人	02
おきなわ歳時記	04
沖縄 美ら海水族館で出会える生き物	05
沖縄の希少植物	05
調査研究	06
普及啓発	08
御城物語	09
沖縄の大木	09
運営管理	10
スポットライトの向こう側	12
財団いんふお	14
編集後記	15
おもろさうしの植物	裏表紙

作品タイトル「桃花水」

北中城文化協会賞

桃の花が咲くころ、雪がとけて水があふれ出す季節を意味する「桃花水」。箱の中から中のがあふれ出す様子をイメージし、螺鈿細工で表現した。左のようにフタを外すと箱の縁にまで螺鈿が施されている。フタをずらしたようなデザインもユニーク。

沖縄県立芸術大学 美術工芸学部 デザイン工芸学科 工芸専攻
新垣 奈央さん(沖縄県出身)

38号から42号までの1年間、沖縄県立芸術大学・大学院造形芸術研究科「第27回卒業・修了作品展」で受賞した4作品が表紙を飾ってきました。次号からは「第28回」受賞作品を紹介予定です。

誌名「南ぬ風（ふえーぬかじ）」とは…

南ぬ風は、梅雨明けとともに南から吹き込んでくる強い風のことです。この南の風によって育まれてきた沖縄の自然や文化をさらに「南ぬ風」に載せ全国に発信していきたいと思っています。



―サバニ大工は県内に数人しかいないそうですね。

技術の継承は厳しい面があります。僕らもサバニだけでは食えないので、FRP製の漁船を作ったり、修理したりしています。現在、伝わっているサバニの製造方法としては本ハギ、南洋ハギがあります。今、師匠が40年前の南洋ハギのハーリー舟を修理しています。南洋ハギは戦前の旧南洋群島サイパンで、和船の影響を受けて作られた製法です。底板から薄い板を曲げてつくる分、板と板とのはぎ合わせに高い技術が必要になる。アウトリーフには向いていませんが、木材を節約できるというメリットがあります。40年前のサバニと向き合い、その技術水準の高さに驚かされ、僕は日々勉強しています。今、サバニの用途はハーリーか帆掛サバニレースですが、観光客向けの体験乗船もどんどんやって、サバニファンが増えれば、未来はあると思います。僕らがつくったサバニを、何十年か後のサバニ大工が見て、技術に感心してくれたらうれしいですね。



刃物をイメージ通りに研げたら一人前。「6年修行しても、まだ研げないカンナはあるし、思い通りにはいかないけど、『研ぎ出し』の感覚は多少つかめてきたかな。奥が深いです」



家庭の台所に設けられた火の神(糸満市内)

沖縄の民間信仰の一つに、火の神がある。火そのものを神聖視する考え方や信仰は世界各地にあり、沖縄でも古くからあった火の信仰が道教などの影響を受け、家庭を守るかまどの神さまとして信仰される形になったという説が主流だ。

祭政一致の琉球王国時代には、島々村々を精神的に統治するといった意味からも、村落全体を守る「地頭火の神」「祝女火の神」など王府の役職名がついた火の神が置かれた。これら村落の火の神は、現在も拝所として地域で大切にされている例が多い。その頂点にあったのが、首里城正殿二階にある「おせんみこちや」だろう。かつては国王や王妃が毎日線香をあげて祈りを捧げていた。

一方、各家庭の火の神はプライベートな存在で、その家の主婦によって祭祀が行われる。別名「御三つ物」とも呼ばれ、昔はかまどの象徴として石を三つ置き、信仰の対象としていた。現在ではその代わりに香炉を置くのが一般的だ。

普段は台所にいる火の神は、旧暦の12月24日に天に昇り、その年その家で起きた出来事を天の神さまに報告すると考えられている。そのため、12月24日には「ウガンブトウチ」を行う。かまどが現役だった時代は、かまどの大掃除をする機会でもあったが、現在は香炉の古い灰を捨てて香炉をきれいに掃除する。

御願解き

ウガンブトウチの手順や、お供えるものは地域や家庭によって異なる。文献によると沖縄本島中南部では香炉をきれいにした後、平線香を3組(線香6本がくつついて1枚のいわゆる沖縄線香を2枚と、3本ずつにタテ割りにしたもの合わせた2枚半を1組と数える)を、天の神・地の神・竜宮の神に捧げる。その後、3本の線香を7組立て、天にのぼる火の神を送り出す「火の神昇り」を行う。これで火の神は天に帰り、人々は年末を迎えることになる。

天に昇った火の神は、旧暦の1月4日にまた家庭へと戻ってくる。これを火の神迎えという。



国王や王妃が毎日祈りを捧げていたとされる、首里城正殿二階にある「おせんみこちや」。1日2回、線香をあげる様子が見られる

沖縄 美ら海水族館で 出会える生き物

Vol.6

和 名：オキナワクルマダイ

科 名：キントキダイ科

学 名：*Pristigenys meyeri*



オキナワクルマダイは沖縄の水深200m付近に生息する深海魚です。ギョロっとした眼と派手な色彩が特徴ですが、実はこの大きな眼には深海魚ならではの秘密があります。

深海の生き物には、眼が光っているように見える魚が多くいます。この光る眼は、タペータム(輝板)と呼ばれています。なぜこんな眼をしているのかというと、暗い深海に理由があります。実は、タペータムは網膜を通り過ぎたわずかな太陽光を反射し、網膜に送り返すことによって深海のような光の少ない場所でも、物が良く見えるしくみになっているのです。

深海という厳しい環境を生き抜くために、そこに暮らす生き物たちは様々な適応能力を持っています。

(芦田 裕史)

沖縄の希少植物

Vol.24

和 名：ヒメカクラン

科 名：ラン科

学 名：*Phaius mishmensis*

レッドデータカテゴリー：

絶滅危惧 IA 類(環境省)、絶滅危惧 IA 類(沖縄県)



雲霧のかかる山地の高所や渓流沿いなど空中湿度が高く薄暗い林床に生育する地生ランです。ラン類のなかでも大型で草丈が 40～60cm になります。花は 12～1 月の寒い時期に咲き、全体的に淡い紅紫色をしています。花を下から受けるように広がる唇弁(リップ)には、濃い紅色の斑点があり、花粉を運んでもらう昆虫に花の存在をアピールしています。

国外では台湾、中国南部、ヒマラヤ、タイ、フィリピンに分布します。国内では沖縄県(沖縄島・石垣島・西表島)のみに限られ、分布域の北限であり学術的に価値があります。県内ではもともと生育地と個体数が極めて少ない上、園芸用の採取で絶滅寸前の危機に瀕しています。本種は、2016年に国内希少野生動植物種に指定され、採取や販売などが法律で禁じられるようになりました。

(阿部 篤志)

エイの「7本目の筋肉」



(写真1) エコーを用いて「黒潮の海」水槽で飼育されているトンガリサカタザメを調査

ジンベエザメが悠然と泳ぐ沖縄美ら海水族館「黒潮の海」水槽の底には、今日も様々な種類のエイが寝そべっています。今回はそんなエイを調べることで分かった、とおきの「世界初」で「世界一」の発見についてお話しします。

人間だけでなく、多くの陸上動物はまばたきをします。まばたきには様々な役割がありますが、何より目の表面を保護するために必要です。ところが陸上動物に対して水生生物のエイをはじめ多くの魚は瞼（まばたき）を持っていないため、まばたきができません。つまり、彼らは別の方法で眼を守る仕組みが必要です。水槽の底にいるエイを見ると、時々眼を引っ込めることがあります。瞼のないエイは、眼を守るために眼球全体を頭の中に引っ込めて完全に隠す能力を持っているのです（写真2）。私たちはこの行動が陸上動物のまばたきに相当すると考えました。

実は、この行動を初めて調べたのは、私たち沖縄美ら島財団総合研究センターでした。これまで、眼を大きく引っ込める能力を持つ生物としてはカエル、トビハゼ、クジラが知られていましたが、エイは

それらに続いて4番目に確認された目が引っ込められる脊椎動物ということになります。「黒潮の海」水槽で飼育されているトンガリサカタザメ（というエイ）をエコー（超音波画像診断装置）を用いて調べたところ、眼球の移動距離は眼球一個分にもなり、脊椎動物で最大であることが分かりました（写真3）。眼を引っ込める能力を持つ動物として有名なカエルでも、移動距離が眼球の半分ほどであること考えると、エイの能力がいかにとびぬけているかが分かります。

つまり、このエイは、（暫定ではありますが）「眼が引っ込む距離世界一の脊椎動物」という称号を手にしたことになります。

エイの眼を引っ込める仕組みを研究している過程で、もう一つ面白いことが分かりました。私たちの眼は合計6本の筋肉で操っています。眼球を左右に動かすのに2本、上下に動かすのに2本、時計反時計回りに回転させるのに2本の筋肉が必要なためです。面白いことに、人間だけでなく、ほとんどの魚類、両生類、爬虫類、鳥類が眼を動かすのに使っている筋肉は6本

なのです。

ところが、その中で数少ない例外がエイです。エイの眼には、余分な「7本目の筋肉」があることが実に70年前から知られていました。この筋肉はエイやサメを研究する解剖学者の間では広く知られていましたが、何のために使われているのかは長らく謎のままでした。私たちがこの筋肉の働きを調べた結果、この7本目の筋肉こそが眼を引っ込めるためのものであることが分かりました。エイの眼の筋

肉の謎が70年ぶりに解けたということになります。エイの進化の歴史は、少なくとも恐竜時代が始まる頃（約2億5千万年前）までさかのぼります。このころサメのような姿をした祖先から、エイは進化してきたと考えられています。彼らが、いつ、どのような過程で眼を引っ込める能力を手に入れたのか。その謎はいまだに残されたままです。

せんが、「水族館での研究」の魅力が凝縮したものです。実は大学や博物館などで生きている生物の研究をすることは容易ではありません。一般的に、研究者がお目当ての水生生物の生きている姿を見ようと思えば、彼らが生きている海に潜る必要がありますし、広い海でそう簡単に出会えるともかぎりません。

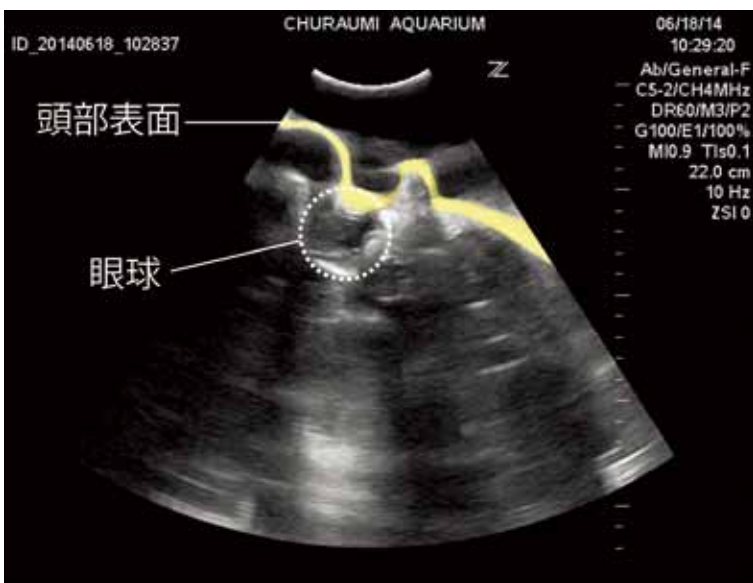
多様な生物が飼育されている水族館は、簡単には出会えない生物たちを目の当たりにする機会をお客様に提供する施設であるばかりでなく、私たち研究者にとっても新たな発見の舞台なのです。

沖縄美ら島財団総合研究センターは、飼育されている生物を研究することで、今後も生物の秘密を明らかにしていきたいと考えています。

（富田武照）



(写真2) 上の写真に比べると、眼を守るために眼球全体を頭の中に引っ込めるようすがよく分かる



(写真3) エコーを用いた調査で眼球の移動距離が脊椎動物で最大であることが分かった

みんなのまちへ水族館が走ります



魚の輸送に使われる活魚車

沖縄美ら島財団はCSR活動の一環として、2003年度より沖縄県内各地で「美ら海移動水族館」を実施しています。移動水族館とは、水族館の展示生物の輸送車輛（通称「活魚車」）に窓を設けた改造車を用い、水族館への来館が困難な方々を訪問し、生きている魚の展示などを行う活動です。実物の生き物たちを見ていただくことで、沖縄の海の生物とそれを取り巻く環境に興味を持つきっかけとしての普及啓発的側面も期待できます。



病院や福祉施設の利用者の観賞

開始当初は、主に医療機関でクリスマスシーズンに入院している子供たちを対象に行なっていました。2008年に新型の活魚車を導入したのを機に、より多くの方々に利用していただけるよう、老人福祉施設なども対象に加えました。その後、継続することで再依頼をしてくださるリピーターや、口コミにより依頼件数が徐々に増え、2015年度は38件、現在までに通算200件余になっています。利用者からは、「魚たちを間近に観察でき、特別な

時間を過ごせた」、「施設の利用者と地域の子供たちとの交流が図れた」、「また来年も来て欲しい」など、数多くの声が寄せられています。

今年度からは、病院や老人福祉施設を対象とした「美ら海移動水族館」（7・8月、1・2月を除く）に加え、地域のお祭りやイベントへ出展する「ふれあい水族館」（7・8月、1・2月のみ）、沖縄県内の離島での「出張水族館」と実施の枠を広げています。

※各種お申し込みとお問い合わせは、沖縄美ら海水族館HP内「教育普及プログラム」をご覧ください。



海を渡って離島へも行きます



美ら海移動水族館の告知ポスター

※CSR活動＝企業が社会に対して責任を果たし、社会とともに発展していくための活動。

御城物語

うぐしくものがたり

Vol.13

かつて、首里の人々が「御城（うぐしく）」と呼び、敬愛のまなざしで見上げた首里城。首里城とその周辺に関係するトリビアを語る歴史エッセイ。

首里城にペリーが来た事を知っていますか？

1853年、日本に開国を迫ったアメリカ軍人のペリーは、日本の浦賀を来航する前に琉球へ訪れ、さらに首里城訪問を果たしたことを知っていますか。

当時、アジアに進出した西洋諸国に遅れをとらないよう、アメリカは東アジアへの重要拠点である琉球を開国させ、蒸気船に必要な石炭の補給基地の建設やアメリカ船への物資の補給を行えるようにする思惑がありました。

来琉したペリーはまず最初に首里城訪問を強く要求しました。王家の住む城へ軍隊を入れることで今後の交渉を有利に行うためです。王府は偽

の行政機関を設け、上層部の役人や王族が直接接触することを避けましたが、強行的なペリーの押しに負け城門を開けてしまいます。しかし通したのは北殿であり、偽の役人たちが対応しました。これまでも来琉した異国人に許さなかった首里城訪問を結果的に阻止できませんでしたが、首里城で最も重要な場所である正殿、そして琉球国王や中樞部を役人たちは守り抜いたのです。当時の人々が首里城を行政機関としてだけではなく、崇高な念を抱く対象として首里城を捉えていたことが伺えます。

（仲嶺絵里奈）



守礼門



首里城北殿

コパティシは小笠原諸島、琉球列島以南のアジア、アフリカなどの熱帯地域に分布する落葉性高木です。沖縄では海岸に自生し、古くから緑陰樹として広場などに植栽されています。

2012年に伊計・宮城・平安座・浜比嘉の4つの島の小中学校7校が統廃合してできた、彩橋小中学校（うるま市平安座）の校門の正面に「シヌグ毛のクワーディーサー」と呼ばれているコパティシがあります。樹高約10m、幹周り3.3m、樹齢は約300年と推定される巨木で、沖縄の名木百選に選出されています。どっしりとした幹と左右に広い樹形からは、逞しさを内側に秘めながら子どもに寄り添う優しさを感じられます。

ここはもともと平安座区の聖地（シヌグ毛）となっており、豊作を願った場所です。現在でも周辺ではシヌグ祭りが年2回（旧暦の6月と8月）行われ、地域の人たちに親しまれています。

これから子ども達の健やかな成長を見守るシンボル、そして、豊作を願う伝統的な場所として地域住民に大切にされていくことでしょう。

（辻本 悟志）



大木

沖縄の

Vol.34

<和名>

コパティシ

(別名)モモタマナ

<科名>

シクンシ科

(学名: Terminalia catappa)

県民に、旅行者に 広く親しまれ より愛される博物館・美術館に



沖縄県立博物館・美術館の入口。人目をひく造形物花壇「ノグチゲラ」を看板とともに設置した。

「観光立県おきなわ」の 推進に寄与する運営を

沖縄県民はもちろん、国内外からの旅行者など、さまざまな人々が行き交う那覇新都心。沖縄県立博物館・美術館がこの地に開館したのが2007（平成19）年のこと。

2016（平成28）年度から、同館の指定管理業務を当財団が受託し、5年契約で管理運営を行っている。「我々企画班では主に広報活動を担当しています。目的は入館者数の増加。それにはまず同館の認知度を上げること。県内向けには企画展やイベントの内容をしっかりと告知して、観光客の皆さんには博物館・美術館の存在を知っていただくことが大事です。当財団のノウハウを生かして、沖縄美ら海水族館や首里城公園に次ぐ沖縄観光の定番スポットにしたいですね」

とは、前川剛企画班長。認知度アップのため、空港やホテル、沖縄観光をPRする場などで誘客を促進するリーフレットを作成した。同じく企画班の金城美奈子主任はこう語る。

「文化的バックグラウンドが違う海外の方は、受け取り方も日本とは異なります。日本語のパンフレットをただ翻訳するのではなく、そういう感覚の違いを意識した内容の印象を」

さらに、当財団のネットワークを活かしたキャンペーンも好評だ。首里城公園または沖縄美ら海水族館の入場券の半券を提示すると、オリジナルトートバッグやクリアファイルなどが当たるガチャガチャをミュージアムショップに設置。企画班の福治広規はこう言う。

「開始2カ月で1845名がガチャを楽しんで行きました。ショップの来店者数も増え、売上にも貢献しています。今後は当財団総合研究センターから動植物や琉球史の専門家を招いてのワークショップや、首里城公園との連携イベントなどにも挑戦したいですね」

他にも、年4回発行の広報誌「はくび通信」を創刊し、周辺地域の案内を掲載した「Oh, My MAP」を作

成。また、参加型のクリスマスマツリイベント、館外のイルミネーションなど、にぎわいを創出する試みも。前川班長は言う。

「アンケートなどで寄せられるお客様の声には、当館をより楽しく、魅力的な場にするためのヒントがあります。これからも年間パスポートの内容や音声ガイドの利便性の向上、イベントの開催などもマーケティング発想で柔軟に対応していきます」

次年度からは当財団総合研究センターの研究実績やノウハウを生かした独自企画、マスコミとの共催による自主企画展など幅広い客層に向けた企画展も開催していく予定だ。

文＝いのうえちず



- ①おもろまち駅改札口。博物館・美術館と首里城の両方へ誘導するサインを設置した。駅から博物館・美術館までの道のりにフラッグを設置することなども、今後の検討課題だ。
- ②おもろまち駅構内のPRコーナー。海洋博公園、沖縄美ら海水族館、首里城公園、沖縄県立博物館・美術館の動画を流し、多言語対応のパンフレットなどを設置している。
- ③おもろまち駅のホームでも、「博物館・美術館の最寄り駅はこちら」とアピール。モノレールを利用する外国人旅行者向けに多言語表示も導入している。
- ④県外観光客に向けて誘客用に新たに作成したリーフレット。
- ⑤年に4回発行する博物館・美術館の広報誌「はくび通信」。
- ⑥オリジナルグッズが当たるガチャキャンペーンをPRするノベルティグッズ。ジンベエザメ型のクリップを添え、QRコードで詳細情報へ誘導する。
- ⑦水族館が首里城の半券で回せるガチャガチャの当たり景品。デザインがかわいいと好評。
- ⑧内容次第で共催できるものは、ロビーや庭などでの持ち込みイベントにも柔軟に対応していきたいと語る企画班メンバー。施設の活性化により、県民へ幅広いサービスを提供するという。
- ⑨企画班メンバー。右から前川剛企画班長、事業広報営業担当の金城美奈子主任、同じく事業広報営業担当の福治広規。



太平洋の島々に伝わる文化を紹介している海洋文化館。2013（平成25）年にリニューアルした際には、門田さんの手がけた写真や映像が数多く展示され、海洋文化館をより魅力ある空間へとバージョンアップした。フォトジャーナリストでもあり、海洋文化に関するドキュメンタリー番組や出版物など制作する「海工房」を率いる演出家でもある。今や海洋文化館に無くてはならない影の立役者、門田さんに話を聞いた。

―門田さんは主に太平洋地域の海洋文化の取材をされていますね。長いキャリアの中で、これまで、どんな地域に行かれましたか？
門田「チューク、ヤップ、パラオ：色々な地域へ行きました。ミクロネシアでは、サタワル、ポロワツト、ブルスク、イファリク、ラモトレック、ウォレアイとか：これらの島は1カ月に1回ぐらい、不定期に出る貨客船があるという程度

有限会社海工房
代表取締役
フォトジャーナリスト
門田 修 もんでん おさむ



で、港で10日間待たされたりすることも珍しくありません。ウォレアイなんかは第二次世界大戦中に造られた飛行場がありますが、定期便はなく、片道4000ドルもするチャーター便になりますし、ヤップ島からサタワル島まで漁船をチャーターすると200万円近くかかりました。取材や撮影という目的でもない、なかなか

個人旅行では行かない場所ですね。こういう飛行機や船には、地元向けのローカル価格もあります。が、外貨を獲得する手段がなかなかない場所で、燃料費も高い中、我々外国人に二重価格が設定されているのは、ある意味仕方ないことだと割り切っています」

―地域経済に貢献することも、ある程度は必要でしょう。
門田「彼らはアメリカの大学を卒業しても仕事がなく、フンドシ姿でふらふらしていたり、現金収入を得るためにアラスカへ出稼ぎに行ったり、経済的にも厳しいんですよ。とはいえ若い人はスマートフォンを持っていたり、漁船にはGPSがついていたりします。それでも空や海を見て航海する技術が受け継がれている」

―日本の感覚では孤島とも思える場所、昔から人と物資の往来があつて、豊かな海洋文化がはぐくまれているのは興味深いですね。
門田「サンゴ礁の島と、火山の島では採れるものが違います。物々交換の必然性があつて、航海を長く続けているうちに、朝貢貿易の道が海上にできたのだと思いますよ」

―門田さんは、もともと写真家だとお聞きしました。海や川にまつわる歴史や民族、船や航海、環境などをテーマにした、海洋文化に関するドキュメンタリー映像や出版物の企画や制作をされているわけですが、海洋文化を専門とされるようになったきっかけは何ですか？

門田「1975（昭和50）年の沖縄国際海洋博覧会の会期中に、ミクロネシア・カロリン諸島のサタワル島から沖縄まで、47日間かけて3000キロメートルもの航海をしてきたカヌー、チェチェメ二号の伴走船に、フォトグラフィアとして乗ったことです。僕も47日間かけてサタワル島から沖縄まで来たわけですが、この航海が、太平洋文化に関わるようになったきっかけです。現在、チェチェメ二号は大阪の国立民族学博物館に展示されています。実は、チェチェメ二号、『よく考える』という意味なんです（笑）。私の人生を決めた船であり、航海でした」

―47日間の航海：それは過酷だったでしょうね。
門田「そうですね。でもそれより思い出深いのは、当時はフィルムカメラの時代ですから、今とは違って、

帰国して現像するまで、結果がわからないということ。これは緊張しますよ（笑）。コダクロームは長持ちすると聞いたので、撮影にはコダックフィルムを使いました。『チェチェメ二号の冒険』という映画もありまして、最近、デジタルリマスターでキレイになったので、一人でも多くの方にご覧いただきたいですね」

―伝統的なカヌーで、それも伝統的な航海で沖縄まで来たというのは、すばらしいですね。ミクロネシアでは伝統的な航海術がしっかり受け継がれているんですね。
門田「ミクロネシアでは、カヌーは実用品として今でも使われています

す。エンジンを搭載したFRP製の船もありますが、エンジンつきの船はガソリンが必要で、小さな島ではガソリンが手に入らないこともある。それに、モノがない島ではFRPの船は壊れても修理ができません。それに対して木製の船は自分たちで修理できる上に、風があれば動く。信頼できるんです。今でも、カヌーがないと生活が成り立たないんですよ」

―1975年といえば、時代背景の影響もありましたか。
門田「そうですね、実質的な日本の支配下にあった第二次世界大戦中のミクロネシアでは、カヌーで往来する島と島との交易が中断され



取材で回ったさまざまな島で門田さんが入手した貝貨なども展示

ました。70年代はミクロネシアやポリネシアの島々でも独立の気運が高まり、自分たちのアイデンティティや伝統文化を見直すという時期でもありました。ハワイでも伝統的なカヌーのホクレア号が建造されましたね。南太平洋に西洋の文化が入ってきたマゼランの時代、カヌーは飛ぶように走ることから、西洋船よりも速い「空飛ぶカヌー」だと記録されたりしていたことも、自分たちの伝統文化を見直し、誇りを持つことの後押しをしたと思います」

―その後もずっと太平洋の海洋文化を取材してこられた。海洋文化館のリニューアルは、門田さんを抜きには語れませんね。
門田「リニューアルの時は、2年ぐ

らいかけて島々を回って、5分ぐらいの動画を約120本製作しま

した。それは、今、大画面で上映されているオリジナル動画にも使われています。それから、実物が展示されているリエン・ポロワット号は、同じくミクロネシアのポロワット島で造られた新造カヌーで、2011年から制作が始まり、2013年に納品されました。その造船の過程も記録しました」

―大画面のオリジナル動画は門田さんの演出ですね。
門田「主にクック諸島で撮影しました。当時最新だったドローンも使っているんですよ。こうした撮影の合間に、島で入手できるアイテムがあればできるだけ集めてくるようにしています。海洋文化館にもネックレスのように連なった貝貨などが展示されています」

文Ⅱいのうえちす

※FRP：繊維強化プラスチック



今なお島民の生活の脚として活躍するミクロネシアの航海カヌー「リエン・ポロワット号」



太平洋地域における海洋民族の歴史や文化を紹介する展示ホールメインスクリーンでは、門田さん演出の実写を含む大型映像が流れる

平成28年度助成事業決定!!

沖縄美ら島財団では、平成20年度より亜熱帯性動植物および歴史文化等に関する調査研究・技術開発並びに普及啓発活動を行う個人、団体に對して、研究活動費の助成を行っています。今年度は県内外より27件の応募をいただき、厳選なる審査の結果6件が採択されました。

今回は、初めて普及啓発活動への助成も採択されました。調査研究・技術開発だけではなく普及啓発活動も含め、多岐にわたる分野の事業における一助となることを期待します。



《採択事業名》

亜熱帯性動物に関する調査研究・技術開発	対象者
イボイモリの保全に向けた基礎的生活史と分布の解明	富永 篤 琉球大学 教育学部 准教授
慶良間諸島座間味島におけるウミガメ類の上陸・産卵および孵化率調査	宮城 里奈 琉球大学 ウミガメ研究会ちゅらがーみー 会長
亜熱帯性植物に関する調査研究・技術開発	対象者
西表島の石灰岩地における希少植物ホットスポットを規定する要因の検証	内貴 章世 琉球大学 熱帯生物園研究センター 准教授
歴史文化に関する調査研究・技術開発	対象者
琉球王国時代の陶器生産の基礎的研究～湧田・壺屋初期の平窯再現研究を中心として～	玉城 望 陶藝 玉城 代表
沖縄県におけるカツオ文化の維持・継承のためのアーカイブ作成に向けた海洋民族学的研究	吉村 健司 国立民族学博物館 外来研究員
普及啓発活動	対象者
沖縄の陸水底生動物図鑑出版事業	山室 真澄 日本陸水学会 会長

首里城祭(琉球王朝絵巻行列) 「世界のウチナーンチュ大会」とも連携

10月28日(金)から11月3日(木)の7日間にわたり首里城公園及び那覇市国際通りにおいて「首里城祭」が開催されました。

琉球舞踊や県内各地域の伝統芸能を披露された「伝統芸能の宴」、冊封使一行が首里城に入城した往時の雰囲気を感じながら守礼門から下之御庭までを行進する様子や琉球国王の即位式を再現された「冊封使行列・冊封儀式」、那覇市国際通りでの「琉球王朝絵巻行列」など文化を感じる催しに、お客様からは琉球王国時代にタイムスリップした様だと喜ばれました。

また、今年は、「世界のウチナーンチュ大会」とも連携したイベントプログラムを用意し、その一つに「琉球王朝絵巻行列」へ海外の方が琉装で出演して下さいました。



琉球王国の華やかなりし姿を一大絵巻行列として再現

- 2017年(平成29)年
- 「新春の宴」
1月1日(日)～3日(火)
 - 「百人御物参」
1月21日(土)・22日(日)

と儀式の再現イベントが続き、歴史・文化の魅力を発信してまいります。ご期待ください。

設立40周年事業

海洋博公園「絵日記コンクール」

県内在住の小中学生を対象に「海洋博公園の思い出」をテーマに、楽しかったこと、面白かったこと、心に残ったことなどを絵日記にして応募いただきました。

約450点の応募作品の中から沖縄県立博物館・美術館の協力のもと想像力や表現に優れた70点を優秀賞として選出しました。

優秀賞作品は沖縄県立博物館・美術館と海洋博公園ハイサイプラザにて、11月11日～12月11日の間、1か月間展示しました。

これからも沖縄美ら島財団は次世代を担う子どもたちの教育や普及啓発活動に取り組んでいきます。



海洋博公園での思い出がのびのびと描かれています。



子どもたちのたくさんの思い出が詰まった絵日記が集まりました！

沖縄国際洋蘭博覧会2017

沖縄国際洋蘭博覧会はランの普及、保全、花卉園芸の普及、芸術文化の創造、観光振興等への寄与、都市緑化の推進と公園の利用促進を図ることを目的として開催され、今回で31回目を迎えます。昨年は、31,848点の出展と3,600名を超えるお客様がいらしました。国内で最も歴史のある国際蘭展で、最優秀作品には内閣総理大臣賞が授与されます。

今回の沖縄国際洋蘭博覧会のテーマは「やんばる花めぐり春あつたか一番花の楽園へ」。県内北部地域で開かれる、桜・椿・ツツジ・ユリに関連したイベントと連携し、フラワーアイランド沖縄を印象付け、一足早い春を届けます。ご来場いただいた皆様には、展示会場一面に装飾された、幻想的な花の世界をお楽しみいただけます。ランの専門家による講演会、栽培教室、相談コーナーやガイドツアー、コサージュ教室や生け花教室等もご用意しています。

花いっぱい彩られた沖縄国際洋蘭博覧会に、ぜひお越し下さい。
●会期：2017年2月4日(土)～2月12日(日)



受賞した蘭の素晴らしさに見入る来場者(昨年の様子)



展示会場一面に装飾された幻想的な花の世界
(会場：海洋博公園 熱帯ドリームセンター)

後編 記集

今号のインタビュー記事は、サバニ大工の高良さん、海洋文化館の映像を製作された門田さん。沖縄やポリネシアの人々が独自の技術を信じて、海を渡っていくお二人のお話は、壮大でロマンがありました。

(編集事務局 M K)

おもろさうしの

植物

其の七

「きみ」
(キビ)

琉球王国第4代尚清王代に首里王府によって編纂された歌謡集「おもろさうし」に登場する植物の紹介コーナー。
※ 海洋博公園内おもろ植物園で見ることができます。

一 雪^{ゆき}げらへ 雪^{ゆき}の 珍^{めづ}らしや
世^が果^が報^{ほう} 真^ま果^が報^{ほう} みおやせ
又^{また} き^きみ^みげらへ き^きみの 珍^{めづ}らしや
又^{また} 積^つみ^み上^あがりぎや
添^そへ^へ頂^{つぎ}ぎや 下^{した}に
〔第二二巻六七二〕
立派な米がとれたみごとさよ
この世果報、真果報を王に奉れ
立派な黍がとれたみごとさよ
この世果報、真果報を王に奉れ
積み上がり(継世門)の、
添へ頂(継世門)の下に
(いっぱい集めて国王様に奉れ)



おもろ名 きみ
和名 キビ
科名 イネ科
方言名 マージン・チミ・チミアワ

〔解説〕

立派な米がとれたみごとさよ。
この豊穡、しあわせを国王様に差し上げよ。立派な黍がとれたみごとさよ。この豊穡、しあわせを国王様に差し上げよ。首里城内の継世門の下に米、黍を集めよ。国王様にこの豊穡を差し上げよ。
とれたての新米を、新黍を、まっ白な雪にたとえて祝福している神女や村人たちのようすを謡っている。しかもその豊穡を国王様に献上することができるしあわせが添えられている。
「よきげらへ」は、雪のように立派な米。米の美称に雪という言葉が使われている。雪の降らない人たちの美しい幻想であろう。
「げらへ」は美称辞。
「世がほう、まがほう」は、果報な世。豊年。豊穡。しあわせな世。
「みおやせ」は、奉れ。差し上げよ。
「つみあがり そへつぎ」は、首里王城東門の継世門の別称。

一口メモ

キビは畑地に栽培される一年生草本で、草丈は1メートル程度。秋に茎の頂より無数の花をもつ花穂を出して、みのもと下垂する。果実はアワより大きく、3ミリメートルほどの球形で黄色から黄白色。原産地は東中央アジアの説があり、インド・パキスタンに近縁な自生種が分布する。寒さや乾燥に強く、栽培期間が短いため古代から貴重な食糧源として栽培されていた。

※ 出典:「おもろさうしの植物」 発行:(財)海洋博覧会記念公園管理財団(現・(一財)沖縄美ら島財団)

沖縄美ら島財団



沖縄美ら島財団
総合研究センター



海洋博公園



首里城公園



美ら島
自然学校



当財団では、これまでに蓄積してきたノウハウを活かし、普及啓発、環境保全、地域貢献等の活動に取り組んでいます。

ちゅ うまんちゅ
美らなる島の輝きを御万人へ

沖縄美ら海水族館



沖縄県立
名護青少年の家



なご
アグリパーク



沖縄県立博物館・
美術館



一般財団法人 沖縄美ら島財団広報誌

季刊誌 **南ぬ風** 冬号 vol.42
2017.1~3

企画・編集・発行



一般財団法人
沖縄美ら島財団
Okinawa Churaumi Foundation

制作・印刷/株式会社 東洋企画印刷

〒905-0206 沖縄県国頭郡本部町字石川888
TEL.0980-48-3645 FAX.0980-48-3900

〒901-0306 沖縄県糸満市西崎町4-21-5 TEL.098-995-4444

2017年1月発行

ISSN 2189-4140